The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	死語の類型論 ： 民族語と民族語、共通語と民族語の関係
Author(s)	稗田, 乃
Citation	スワヒリ＆アフリカ研究. 1999, 9, p. 44-59
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71094
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

死語の類型論

－民族語と民族語、共通語と民族語の関係－

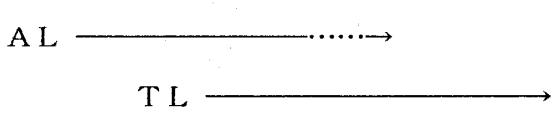
稗田乃

1．はじめに

現在まで歴史のなかで多くの言語が死語になり、また、逆に多くの言語が生まれたに違いない。我々が現在、目にしている言語の分布は、歴史のなかで多くの言語が死語になり、また、逆に多くの言語が生まれた結果である歴史の一断面を反映しているにすぎない。言語が死語になったといっても、けっしてその言語の話し手が絶滅したといっているわけではない。１つの言語の話し手が絶滅するというような虐殺が歴史上、多く存在したとは考えにくい。そうではなく言語交替が生じたのである。ある言語の話し手が、みずからの言語を話すのをやめ、他の言語にのりかえたのである。

言語が交替するには、バイリンガリズムが必要条件となる。なぜなら放棄される言語（Abandoned Language, 以後ＡＬ）を話していた人々がＡＬからターゲット言語（Target Language, 以後ＴＬ）にかれらの言語を一気に交替すると考えるのは、不自然である。ＴＬに交替する以前に、すくなくともＴＬについていくらかの言語能力を、ＡＬの話し手はもっていなければならない。さもなければ、かれらのなかで情報伝達に大きな混乱が生じるであろう。より自然な考えは、ＡＬとＴＬが１つの社会で並行して話されている時期が存在すると考えることである。つまりバイリンガリズムの時期が存在すると考えることである（図１）。図１においてＡＬとＴＬの線が重なる部分が２つの言語がともに話されるバイリンガルの時期を示している。

図１　言語交替



言語交替の条件となるバイリンガリズムについて概観しておこう。バイリンガリズムには、安

定的バイリンガリズムと同化的バイリンガリズムがある。安定的バイリンガリズムでは、複数の言語が相補的に機能しあい、平行して使用される。同化的バイリンガリズムでは、言語の交替が伴われる。事例研究の場である東アフリカにおいて共通語である英語あるいはスワヒリ語と、民族語によるバイリンガリズムは、安定的バイリンガリズムを示している。また、複数の民族語どうしのバイリンガリズムにおいても安定的バイリンガリズムが観察される。一方、同化的バイリンガリズムが観察されるのは、民族語どうしのバイリンガリズムにおいてのみであるといわれてきた。しかし最近では共通語と民族語のあいだにも同化的バイリンガリズムが存在する。東アフリカでは２００ちかくの言語がすでに死語になるか、あるいは、死語になる危機に陥っているといわれている（Brenzinger 1992)。本論では、民族語と民族語、民族語と共通語のあいだの関係という観点から言語が死語になる過程を考察する。

言語が死語になるという現象を、ただ単に言語面での現象として説明することはできない。社会的現象として捉えることが必要である。言語が死語になる過程を社会的現象の観点から見てみよう。まずＡＬとＴＬを話している社会において、なんらかの社会的要因によりＡＬとＴＬの話される領域（Domain）に偏りが生じる。またこの社会的要因は、ＡＬの話し手にＡＬにたいする否定的な言語態度をもたらす。同時にＡＬとＴＬの話される領域の偏りは、ＡＬの話し手のＡＬにたいする否定的な言語態度を増幅させる。つぎにＡＬの話し手のＡＬにたいする否定的な言語態度は、次世代へのＡＬの引き継ぎを遮断する。つまり次世代に言語を習得させるときＡＬではなく、ＴＬを好ましいとするため、次世代ではＴＬが第１言語として獲得される。次世代においてＡＬが習得されようともそれは第１言語としてではなく、第２言語としてである。この時期をＡＬとＴＬの第１言語と第２言語の交替期と呼ぶ。第１言語と第２言語の交替は、ＡＬとＴＬの言語使用領域の偏りを増幅させる。つまりＡＬの使用領域がますます縮小し、ＴＬの使用領域が拡大する。ついにＡＬは、たとえばＡＬをもともと話していた集団のアイデンティティを表現するためだけの秘密語など、ある特定の目的をもった言語として用いられる以外には使用されなくなる。そしてついにＡＬは、まったく形もとどめなくなる（図２）1)。

ＡＬが第１言語として話されなくなった段階、ＡＬの使用領域が縮小してしまった段階、そしてＡＬがある限られた目的の言語としてのみ用いられる段階、最後に地球上からまったく形をとどめなくなった段階、これらの段階のなかでどの段階を言語の死語と考えるかは問題ではない。

図２ 死語の過程

社会的要因 → 言語使用領域の偏り

↓

ＡＬにたいする

否定的言語態度 → 次世代へのＡＬの

引き継ぎの遮断

↓

第１言語と第２言語の

交替

↓

ＡＬの使用領域の

縮小

↓

ＡＬの限られた目的の

言語としての使用

↓

ＡＬの消滅

２．事例研究

同化的バイリンガリズムのなかで言語交替をおこなってしまったと考えられる事例として、また、言語交替の途中にある事例としてエチオピアで話されている言語をとりあげる 2)。ケニアでは共通語としてスワヒリ語と英語が存在する。共通語と民族語のあいだの安定的バイリンガリズムの事例と民族語どうしのあいだでの同化的バイリンガリズムの事例を提示する 3)。タンザニアにおいて共通語であるスワヒリ語が民族語を死語に追いやりつつある。共通語と民族語が同化的バイリンガリズムの状態をつくっていることを示したい 4)。

２－１．エチオピア

（１）ゴンバ（Gomba）

エチオピア西南部を流れるオモ川は、国境をこえてケニアのトゥルカナ湖にたどりつく。ケニアとの国境より少しオモ川をさかのぼった東岸にカラ（Kara）と呼ばれる人々が住んでいる。

カラの人々のなかにゴンバと呼ばれる人々がいる。かれらは、カラ語を話し、また、生業や服装、習慣といった文化もまったくカラの人々のそれらと区別できない。政治的行動もカラの人々とともにしている。 かれらは、過去にカラ語とはちがう言語を話し、カラの人々とは異なる民族であったとの記憶をもっている。

この事例は、人々の記憶による以外はゴンバ語の存在したことを証明することはできないが、ゴンバ語からカラ語への言語交替をゴンバの人々がおこなったことを暗示している。

（2）オモ・ムルレ（Omo-Murle）

オモ川をくだり、カラの人々の南にンガリッチ（Ngarich）と呼ばれる人々がニャンガトム（Nyangatom）の人々のあいだに住んでいる。ンガリッチという名前は、ニャンガトムの人々がかれらを呼ぶときの名前である。かれら自身は、みずからをムルレ（Murle）と呼んでいるので、かれらの自称であるムルレをここでは用いる。ただし同じムルレ（Murle）という名前の人々がスーダン南部に住んでいるので、それと区別するためにエチオピアに住む人々をオモ・ムルレと呼ぶことにする。オモ・ムルレの人々は、いまでも（ただし１９９０年の調査の時点で）９名の老人がかれらの言語であるオモ・ムルレ語を話すことができた。かれら老人より若い世代において、オモ・ムルレ語の若干の単語や言い回しを記憶する者が存在した。９名の老人を含めてオモ・ムルレの人々は、全員がニャンガトム語を話すことができた。オモ・ムルレ語とニャンガトム語は、同じナイル・サハラ言語群に所属する言語ではあるが、系統的にかなり離れており、また、言語構造もかなり違っていて、互いに理解が可能ではない。

オモ・ムルレの人々は、オモ・ムルレ語からニャンガトム語への言語交替をほぼ完成させつつある。オモ・ムルレの人々は、オモ・ムルレ語をかれらの第２言語としても保持することなく、急速にニャンガトム語にかれらの言語を交替しつつある。オモ・ムルレ語がかれらの第２言語として用いられた期間は、かなり短いものであったと推察できる。このようなことがなぜおこったのかは、つぎの理由が考えられるだろう。オモ・ムルレの人々は、家畜をもっている。その家畜を村から離れた牧草地で放牧するとき、オモ・ムルレの少年は家畜をつれて放牧地におもむき、家畜キャンプでニャンガトムの人々といっしょに暮らす。このとき家畜キャンプで使用される言語は、ニャンガトム語である。こうして若い世代から急速にオモ・ムルレ語からニャンガトム語への交替が生じた。

オモ・ムルレの人々は、ニャンガトムという民族のなかで１つの地域集団（Territorial Group）を形成している。ニャンガトムの人々は、他の民族集団を集団の枠組みをとりはらうことなく、そのままのかたまりで地域集団としてニャンガトムという枠組みのなかに取り込むことで勢力

を拡大してきた。ニャンガトム語とは異なる言語を過去に話したであろう民族がニャンガトムのなかの地域集団となっている。

オモ・ムルレの人々は、生業や習慣はニャンガトムの人々のそれらとほぼ同じと考えてよい。しかし服装は、注意深く観察するとわずかにニャンガトムの人々のそれと異なっている。また、かれらは、かれらが故地をはなれてオモ川流域へと移動し、ニャンガトムの人々と出会った歴史を詳細に語り継いでいる。このことが、オモ・ムルレの人々にかれらのンガリッチというアイデンティティを保持する助けとなっている。

（3）コエグ（Koegu）＃1

カラの人々のなかにはムグジ（Muguji）と呼ばれる人々も住んでいる。かれらは、みずからをコエグと呼んでいる。カラの人々の人口が約２０００人であるのにたいして、コエグ＃１の人々の人口はその１０分の１の約２００人である。コエグ＃１の人々は、かれらの言語であるコエグ語を話すことができる。ただしコエグ語はかれらの第２言語として習得され、かれらの第１言語はすでにカラ語になっている。コエグ語は、ナイル・サハラ言語群に所属し、カラ語はアフラジアン言語群に所属する。これら２つの言語は、系統関係がまったく異なる言語であり、言語構造もまったく異にする。これら２つの言語のあいだでは、理解は不可能である。

ここでは言語交替の途中の段階である第１言語と第２言語の交替が観察される。コエグ＃１の人々は、かれらの第１言語をコエグ語からカラ語にかえた。第１言語であったコエグ語は、かれらの第２言語になった。言語交替は、放棄される言語からターゲット言語へ一気に交替するのではなく、まず、放棄される言語が第１言語でターゲット言語が第２言語である状態から、つぎに、放棄される言語が第２言語となり、ターゲット言語が第１言語になる段階がくる。コエグ＃１の人々の言語使用状況は、この後者の段階にあると考えられる。

オモ・ムルレの人々の場合は、ターゲット言語が第１言語になり、放棄される言語が第２言語である段階の期間がかなり短い。一方、コエグ＃１の人々の場合は、第１言語と第２言語が交替する期間がしばらく続くと考えられる。

コエグの人々は、政治行動をカラの人々と同じにしている。しかし、カラの人々とコエグ＃１の人々のあいだには、一種の差別的な関係が存在する。カラの人々は、コエグ＃１の人々と同じ容器から液体状の食事をともにしない。アフリカでは１つの容器をまわして、酒やコーヒーやおかゆのような食事を摂るのが社会的に重要な役割をもっているので、まわし飲み、あるいは、まわし食いをおこなわないことは、社会的に重大な要素である。またコエグ＃１の人々とカラの人々のあいだには通婚がない。これら差別的態度は、つねにコエグ＃１の人々に、また

同時に、カラの人々にもアイデンティティの確認を迫る。

（4）コエグ（Koegu）＃2

コエグ語を話す人々は、第1言語をカラ語に交替してしまった約２００人のほかに、いまだにコエグ語を第1言語にしている人々がいる。かれらは、カラの人々といっしょに住んでいない。カラの人々が住む地域より上流のオモ川西岸に住んでいる。このコエグの人々を、第1言語をカラ語に交替してしまったコエグ＃1の人々と区別するために、コエグ＃2と呼んでおく。かれらは、本来はオモ川の堤防に散在して家をかまえるが、１９８８年から１９９０年の調査の時点では他の民族からの脅威をさけるためにクチュル（Kuchur）という村に集まり住んでいた。人口は、約３００人である。かれらは、１０代半ばになるとカラ語を第2言語として十分に話せるようになる。カラ語のかれらの第2言語能力に男女差は、ほとんど観察されない。このことは、第2言語としてカラ語はコエグ＃2に人々のあいだで成熟していることを示している。

コエグ＃2の人々のアイデンティティは、もちろんコエグである。この人々もコエグ＃1の人々と同じくカラの人々とは一種の差別的関係をもっている。カラの人々とは通婚がなく、やはり1つの容器から液体状の食事をともにしない。カラの人々とは離れて住んでいるけれど、カラの人々から耕作地を借りているという理由でカラの人々の農作業を手伝わせられたり、はちみつのような贈り物をさせられたりする。

コエグ＃2の人々は、カラの人々とは異なる文化をもっているようにみえる。生業はカラの人々と同じ農業をしているけれど、オモ川における漁労や河辺林でのはちみつ採取や食用植物採取がコエグ＃2の人々の生業において大きな比重をしめている。そして川や森での自然にたいする知識や宗教がコエグ＃2の人々の文化を特徴づけている。しかし政府やＮＧＯといった外の世界との関係においては、カラの人々とコエグ＃1の人々は、1つの集団としてアイデンティティを発現させる。それをカラの人々とコエグ＃1の人々は、カロ（Karo）と呼ぶ。カロは、カラ語で名詞語尾を変化させた「カラ」という名詞の集合複数形である。

これらエチオピアでの事例は、民族のダイナミズムを示している。民族は、固定的なものではなく、生成をくりかえすものだということである。民族の生成において民族のアイデンティティは、重層的に存在する。たとえばオモ・ムルレの人々は、ニャンガトムというアイデンティティをもつと同時にオモ・ムルレ（ンガリッチ）というアイデンティティをもつ。

これらアイデンティティと言語の関係をみると、面白いことがみえてくる。言語の交替が生じてもすぐさまアイデンティティの変化が生じるわけではない。しかもアイデンティティのあ

り方によって言語交替の仕方に違いがあるように思える。アイデンティティのあり方は、図2のＡＬにたいする言語態度に影響をあたえるのである。ただしアイデンティティのあり方の違いは、ターゲット言語を話す人々の社会編成原理と放棄される言語を話す人々のそれへの受容態度によって決定されるように考えられる。

オモ・ムルレの人々の示す言語交替は、第１言語と第２言語の交替する期間が短く、コエグの人々の言語交替は、第１言語と第２言語の交替する期間がかなり長く続くと考えられる。これは、ニャンガトムの人々の社会編成原理が他の民族を地域集団としてそっくり取り込むようにできており、オモ・ムルレの人々がそれを積極的に受容しているからである。個人のアイデンティティは父方の出自によって決定されるから、集団全体の枠を壊さずそっくり取り込むことは、個人のアイデンティティの変更を要求しない。異なるもう１つのアイデンティティがおおいかぶさるだけなので、このようなアイデンティティの受容は容易なのではないだろうか。ただしニャンガトムの一地域集団としてニャンガトムの社会規範にしたがい行動することをしいられることで、ニャンガトムという集団への帰属意識を確認させられる。

カラの人々の社会編成原理は、他民族を被差別集団として社会の辺境に位置づける。そのためコエグの人々は、日常の差別的習慣によって常にコエグというアイデンティティを意識させられる。そのためコエグの人々にとってカラ、あるいは、カロというアイデンティティへの変更は容易でない。

２－２．ケニア

（１）ヌビ（Nubi）

ニャンザ州のキシイの町から２．３kmのところにヌビと呼ばれる人々が住んでいる。かれらのまわりにはバントゥ諸語に所属するグシイ（Gusii）語を話す人々がとりまいている。ヌビ語は、アラビア語のクレオールであり、ヌビ語とグシイ語は系統的にまったく異なっている。また言語構造もまったく異なり、ヌビ語とグシイ語は互いに理解不可能である。ヌビの人々は、祖先が植民地時代にスーダンとウガンダから植民地政府によってつれてこられた人々の末裔である。いまでも故地で話されていた言語であるアルル（Alur）語を記憶する老人が存在する。

ヌビの人々が近隣の民族とコミュニケーションをする場合、第２言語を用いる必要がある。その言語は、ケニアの共通語であるスワヒリ語であって、まわりで話されているグシイ語ではない。ヌビの人々は、ほんのわずかなひとたちがグシイ語を知るだけで、それにくらべてかれらのあいだでのスワヒリ語の普及率はかなり高い。バイリンガリズムにもっとも影響されにくい

家庭という領域においてもヌビの人々は、半数がスワヒリ語とヌビ語を用いる。この事実は、第１言語であるヌビ語がゆるやかにその地位をスワヒリ語にとってかわられつつあることを示している。しかしいまだに誰１人、スワヒリ語を第１言語として話す人はあらわれていない。また言語態度の調査は、ヌビの人々がヌビ語に高い忠誠心をもつことを示している。言語態度がそのまま言語使用、あるいは、言語習得に反映されるならば、ヌビの人々のあいだにはヌビ語とスワヒリ語の安定的バイリンガリズムが発展しつつあるようにみえる。ヌビ語とグシイ語という民族語どうしのあいだのバイリンガリズムであれば、同化的バイリンガリズムが発展しそうな状況で共通語が同化的バイリンガリズムの発展を阻止し、安定的バイリンガリズムを形成するのに役立っているようにみえる。

ヌビ語を話す人々がこのようにヌビ語にたいする強い忠誠心をもつ理由はなんであろうか。それは、かれらの特殊な歴史とそれにましてかれらの宗教にあると考えられる。かれらのまわりに住む人々がキリスト教、あるいは、土着の宗教を信じているのにたいして、ヌビの人々だけがイスラム教を信仰している。ヌビ語がイスラム信仰と強く結びつき、ヌビ語がかれらのアイデンティティと強く関係しているのである。ヌビ語がかれらのアイデンティティを表出する機能をはたし、共通語であるスワヒリ語が他民族とのコミュニケーションの機能をはたしている。これら２つの言語は、使用領域を分割し、補い合っている。

（２）ロゴリ（Logori）

ケニア西部にルオ（Luo）と呼ばれる人々が住んでいる。そのなかにロゴリ語を話す人々が住む。ロゴリ語は、バントゥ諸語に所属するルヒヤ（Luhiya）語の方言であり、ルオ語はナイル・サハラ言語群に所属し、２つの言語は系統的にも構造的にもまったく異なる言語である。ロゴリの人々は、かなり高い第２言語の言語能力をもつ。第２言語としてロゴリの人々の約２０％がルオ語の知識を、８０％がスワヒリ語の知識を、２０％が英語の知識をもつ。ヌビの人々が成長期のはやい時期に第２言語のスワヒリ語を習得するのにたいして、ロゴリの人々はスワヒリ語を習得する時期はかなり遅い。またロゴリの人々のスワヒリ語能力には、男女差が存在する。女性にくらべて男性のスワヒリ語能力は高い。これは、ロゴリの人々の社会経済的環境が決定している。

ロゴリの人々の言語態度は、ヌビの人々のそれとは対照的である。ロゴリの人々の半数ちかくがスワヒリ語が好ましいと考え、２０％弱がスワヒリ語とロゴリ語の双方が好ましいと考える。ロゴリ語が好ましいと考えるのは、３０％強のみである。子供に学んで欲しい言語にスワヒリ語と答えた者とロゴリ語と答えた者は、ほぼ同数である。このようにロゴリ社会の１部に

存在するロゴリ語にたいする否定的な言語態度は、次世代へのロゴリ語の継承を阻止する。その結果、次世代ではスワヒリ語を第１言語に、ロゴリ語を第２言語にする話者が出現するであろう。

ロゴリの男性は、たいていが青年期にたっするとケニアの首都であるナイロビに出稼ぎにでる。そこでの職業の確保には少なくともスワヒリ語の能力が必要であり、英語の知識があればさらに有利である。また、故郷においてはスワヒリ語と英語は、ロゴリ人「出稼ぎ民」のアイデンティティの表出手段となっている。これがロゴリ語にたいする否定的な言語態度の原因となる。それとは反対にナイロビではロゴリ語がかれらのアイデンティティのよりどころとなる可能性がある。もしそうなら、ロゴリ語はある限られた目的のために使用される言語として存続できる。

（３）ワアタ（Waata）

ケニア海岸部、キリフィ地区にワアタと呼ばれる人々が住んでいる。かれらのまわりにはバントゥ諸語に所属するギリヤマ（Giryama）語を話す人々が住んでいる。ワアタ語は、アフラジアン言語群に所属し、ギリヤマ語とは系統的にも言語構造においてもまったく違っている。ワアタの人々は、たいてい第２言語としてスワヒリ語とギリヤマ語を話す。家庭内でワアタ語が用いられるが、家庭外では話し相手がワアタの人であろうともギリヤマ語かスワヒリ語が用いられる。このようにバイリンガリズムにもっとも影響されない家庭という領域だけでワアタ語が使用されている。それ以外の領域でワアタ語は使用されない。

ではワアタの人々がなぜワアタ語を保持できるのか。つぎの理由が考えられる。ワアタの人々だけが、近隣の民族のなかで魚食をしないという禁忌をもっている。これがかれらのアイデンティティとなっている可能性がある。

上記（１）、（２）、（３）の事例は、言語が死語になる脅威にさらされていながら、なんとか保持されている例であった。すべては民族語と共通語によるバイリンガリズム状況を形成している。民族語と共通語による安定的バイリンガリズムが言語を死語の脅威から守ると考えられたが、実際は言語の保持にかんしてそれほど安心できるような状態ではないことが３つの事例からも分かる。アイデンティティにかんして言えば、ヌビの人々は宗教という裏付けがあり、ロゴリの人々は出稼ぎ民という新しいアイデンティティを創出している。ワアタの人々には禁忌がアイデンティティの発現になっている。

（４）ブルジ（Burji）

ケニア北部、マルサビットの町のちかくにブルジと呼ばれる人々が住んでいる。ブルジの人々

は、かれらの言語であるブルジ語を、まわりをとりまくボラナ（Borana）語に交替しはじめている。ブルジ語とボラナ語は、ともにアフラジアン言語群に所属するが、系統的には比較的に離れていて、相互にコミュニケーションが不可能である。若い世代から第１言語と第２言語の交替が生じている。ブルジ語だけのモノリンガルは、すでに存在しない。２０才以下の話者は、ボラナ語のモノリンガルであるか、あるいは、ボラナ語を第１言語にしてしまっている。かれらの３５％がスワヒリ語を、１０％が英語を知っている。この低い共通語の普及率ゆえに、かれらは、社会の外とのコミュニケーションをボラナ語に頼ることになる。

ブルジの人々は、２０世紀のはじめにエチオピアからケニアに移動してきた人々である。ケニアでかれらのものと同質の生業や文化をもつ人々に出会った。ブルジの人々とボラナの人々のあいだには、双方向の通婚関係が存在する。

２－１のエチオピアの事例では民族語だけがバイリンガリズムの言語状況に関与していた。一方、ケニアでは言語状況を考慮するうえで共通語としてのスワヒリ語を無視することはできない。

ケニアではスワヒリ語が１９５３年までアフリカ人の初等教育において教授用言語として用いられた。１９５０年代に植民地主義にたいするアフリカ人による抵抗運動の象徴にスワヒリ語がなることを恐れたイギリス植民地政府は、初等教育における教授用言語をスワヒリ語から英語に変更した。いまでもケニアでは初等教育の第１学年からたいていの学校が教授用言語に英語を採用している。例外的に地域の実情にあわせてスワヒリ語、あるいは、その地域で話されている民族語を教授用言語に採用できるが、それも初等教育の第１学年までである。第２学年になると例外なく英語が教授用言語として全国の学校で用いられる。しかし、ケニア国民は、その６５％が第２言語としてスワヒリ語を知っており、１６％のみが第２言語として英語を知っている。このことは、スワヒリ語が教育によって普及したのではなく、日常生活のなかで習得されることを示している。

法律はスワヒリ語をケニアの国語と、また、英語を公用語と定めている。いまでもますます威信の高くなっている言語は、英語であって、スワヒリ語ではないことが、スワヒリ語と民族語とのあいだの安定的バイリンガリズムをつくりだす要因になっている。

２－３．タンザニア

タンザニアではケニアと違い、一貫してスワヒリ語を発展させる政策がとられた。しかしケニアと同様にスワヒリ語が威信ある言語というわけではなかった。１９６７年のニエレレ大統

領によるアルーシャ宣言以後にとられたさまざまなスワヒリ語発展政策によって、スワヒリ語は、タンザニアで威信を獲得していった。そのときとられた言語政策は、National Swahili Council の創設、初等教育での教授用言語としてスワヒリ語を採用すること、公用語として強化すること、中等教育で教授用言語として使用することの準備、あらゆる面でのスワヒリ語使用のキャンペーンであった 5)。こうしたスワヒリ語にたいする手厚い政策によって、スワヒリ語は、タンザニアで威信を獲得することができた。国家により手厚く保護されているスワヒリ語であるが、では、スワヒリ語と民族語がタンザニアの地方ではどのような言語状況を示しているのかを考察するため、タンザニア内陸部の小さな村を事例に紹介する。

（1）マンゴーラ（Mangola）村

タンザニア北西部、アルーシャの町から西へむかう観光で有名なセレンゲティやンゴロンゴロへ行く道を南にわかれると、マンゴーラという小さな村がある。この村は、１９６１年に日本のアフリカ研究者がはじめてアフリカで人類学のフィールドワークをおこなったことで有名である。この村で話されている言語は、コイサン言語群に所属すると言われていたハッツア（Hatsa）語（いまはコイサン言語群に属さず、独立した言語であるとの説がある）、ナイル・サハラ言語群に所属するダトーガ（Datoga）語、アフラジアン言語群に所属するイラク（Iraq）語、さまざまなバントゥ語とそして共通語のスワヒリ語である。これらの言語は、系統的にも構造的にもまったく異なっており、これらの言語のあいだで理解は不可能である。

この村での言語能力と言語使用は、世代間ではっきりとわかれる。老年層は、それぞれの民族語を第１言語とし、第２言語としてわずかにスワヒリ語を用いる。かれらのスワヒリ語能力は、日常生活において使用するにも十分ではない。壮年層は、それぞれの民族語を第１言語とし、第２言語にスワヒリ語を用いる。かれらのスワヒリ語能力は、日常生活において使用するのに十分である。若年層、とくに、１０代以下ではスワヒリ語がかれらの第１言語になっている。１０代以下では民族語を第２言語としても知らない、まったくのスワヒリ語モノリンガルも存在する。このことは、民族語からスワヒリ語への言語交替が、若年層で生じることをしめしている。この世代が成長ののちに第２言語として民族語を習得したとしても、すくなくとも第１言語と第２言語の交替が生じることは明らかである。

最もバイリンガルに影響されない家庭という場面での言語使用のパターンは、子供どうしではスワヒリ語が、子供とその両親や祖父母のあいだでもスワヒリ語が使用される。両親どうしは、同一の民族語を第１言語にするのであれば、その民族語が使用され、夫と妻が第１言語を同じにしない場合は、スワヒリ語が使用されるが、夫の第１言語である民族語が使用されるこ

ともある。両親と両親の親たちのあいだでは民族語がもっぱら使用される。

家庭の外では、子供たちのあいだではスワヒリ語のみが使用される。それ以上の世代では話し相手によって言語が使い分けられる。相手が話者本人と同じ民族語を第１言語にするとき、その民族語を使用する。相手の第１言語が話者本人の第１言語と同じでないとき、スワヒリ語が使用される。

スワヒリ語を第１言語とする、あるいは、スワヒリ語しか話せない子供の世代が関与しないかぎり、民族語の使用が依然、優勢のように見える。しかし言語態度は、スワヒリ語が圧倒的に好まれており、子供にはスワヒリ語を学んで欲しいと考えられている。民族語を第１言語にする世代のなかにも心のなかでのお祈りでさへスワヒリ語ですると答えるものがでてきている。

上で述べた言語状況は、村のなかでの状況をしめしている。この村のまわりにはハッツアやダトーガやイラクの人々が居住している。かれらの居住地では若年層においても第１言語はかれらの民族語であり、スワヒリ語は第２言語となっている。家庭内ではもっぱら民族語が使用されている。

村のなかだけではなく、村のまわりでも将来は民族語からスワヒリ語への言語交替が生じるのであろうが、言語交替の発展はこのような小地域においても地理的な差があることが分かる。

スワヒリ語の発展を考えるとき、ケニアではスワヒリ語を内陸部に広めた植民地政府やキリスト教宣教団の役割を考えればよいが、タンザニアにおいてはケニアと違って、１９世紀以後内陸部にスワヒリ文化が拡大する過程を考慮しなければならない。スワヒリ文化が拡大するプロセスは、スワヒリ化と呼ばれている。日野は、スワヒリ文化の性格を５つの属性で説明する。その５つの属性とは、（１）人種的特性、（２）都市性、（３）イスラム、（４）スワヒリ的生活様式、（５）スワヒリ語である。そしてスワヒリ化は、以下のプロセスで生じるという。まずスワヒリ語が、地域共通語として話される。ついでスワヒリ的習慣や技術が取り入れられる。つぎにイスラム教への改宗がおこる。さらに都市生活の受容となる。上の属性の（５）、（４）、（３）、（２）という順でスワヒリ化がおこるという。

マンゴーラ村でも過去に、いわゆるこのスワヒリ化がおこりかけたことがあった。マンゴーラ村は、豊かな泉の水を利用して形づくられた開拓村である。開拓初期に入植した農耕民は、さまざまな言語を第１言語に話す人々であったが、村ではスワヒリ語を話すことによって、もともとこの地に住んでいたハッツアやダトーガやイラクの人々と異なるアイデンティティを出現させた。そしてみずから自分たちのことをスワヒリ人と呼んだ6)。この人々は、日野の主張するように、スワヒリ語の採用、スワヒリ的生活様式の採用、イスラム教への改宗というプロ

セスでスワヒリ化を示してみせた。そしてマンゴーラ村という種々雑多な民族からなる村をつくりあげることで、一種の小さな都市のようなものをつくりあげた。

このスワヒリ化は、これ以上、進展しなかった。逆にスワヒリ化は、解体されたと考えられる。なぜなら開拓初期に入植した人々とその末裔は、イスラム教を信仰し、いまでもみずからをスワヒリ人と呼ぶことはある。しかし、かれらがみずからをスワヒリ人と呼ぶことはまれになっている。もとの父方出自のアイデンティティを表出することが多くなっている。また現在でも多くの農耕民が、村に流入している。かれらはけっしてみずからをスワヒリ人と名のることはない。開拓初期にみずからをスワヒリ人と名のった人々は、その地域にすでに住む他民族集団との関係においてなんらかのアイデンティティを必要としたのであった。そしてスワヒリ語を話すことによって、スワヒリ人と名のったのであった。いまではかれら以外のあらゆる民族が、ハッツアの人々もダトーガの人々もイラクの人々もスワヒリ語を話す。生業もハッツアの人々、ダトーガの人々、イラクの人々、すべてが耕作をおこない、なんら変わらなくなってしまった。家や普段の服装も一部の例外をのぞいて、たいして変わらなくなってしまっている。

いまマンゴーラ村に住む人々は、たいていはみずからのアイデンティティを父方の出自で表現する。アイデンティティの表現といっても、スワヒリ語で「カビラ」（アラビア語からの借用語。「民族」と翻訳できるか。）とは何かと質問すると、父方の出自を答えるだけのことを意味している。第１言語としていまだ民族語を話している話者は、大体において言語と「カビラ」は一致する。しかしスワヒリ語を第１言語とする話者は、言語と「カビラ」は一致しない。スワヒリ語しか話せない１０代以下の世代でも、かれらの「カビラ」は父方出自によって決定される。過去にスワヒリ人と名のった人々のアイデンティティは、村では解体してしまい、父方の出自でアイデンティティを表現するようになったのである。

マンゴーラ村においていまの１０代以下の世代で見られる言語交替から考えて、民族語からスワヒリ語への言語交替が生じるであろうと予想できる。しかし村で過去に生じたスワヒリ化、つまり、スワヒリ人の創出はありえない。スワヒリ語の受容がスワヒリ人といいうアイデンティティの創出にむかうことなく、アイデンティティは父方出自のまま保持される。アイデンティティは、父方出自であるとして、もはやそれは言語や生活様式や文化や社会組織というような裏付けがない。マンゴーラ村の住人が父方出自のつぎに選ぶアイデンティティは、地縁である。

（２）パレ（Pare）

タンザニア北部、キリマンジャロのふもとにモシの町がある。モシの町のまわりにパレと呼

ばれる人々が住んでいる。かれらは、スワヒリ語に言語を交替してしまっている。かれらのスワヒリ語受容のしかたは、まず、パレ人でありながらパレ社会に順応しがたい人々がパレ社会の外にあった交易場で話されたスワヒリ語を習得した。つぎにドイツ植民地政府がアフリカ人兵士にスワヒリ語で命令をしたことで、パレの人々のなかにもスワヒリ語が広がりはじめた。このときスワヒリ語は、威信のある言語ではなかった。その後、政府のスワヒリ語振興政策によりスワヒリ語は威信のある言語となった。そしてスワヒリ語は、パレ社会で広がっていった。スワヒリ語振興政策においてとくに教育がはたした役割が大きい。教育を受けた者だけに就業の機会が与えられた。この過程は、おそらくタンザニアのいたるところで見られるものであろう。

パレ社会のスワヒリ語受容の特徴は、パレ語そのものに大きな地域方言差が存在したことにある。大きな地域方言差ゆえにパレ語方言間でコミュニケーションがかなり困難であった。その結果、パレ語の異なる地域方言話者間の共通語として、はやくからスワヒリ語が使用された。スワヒリ語の受容が早くそして完全にちかいまでにおこなわれた。いまではパレの人々が話すスワヒリ語にスタイルの違いが生じている。1部の教育を受けた人々が話すスワヒリ語は、「高級スワヒリ語（Kiswahili juu)」と呼ばれる。そうでない人々が話すスワヒリ語は、「下級スワヒリ語（Kiswahili chini)」と呼ばれる。

パレ社会の1部に教育を受けたエリートが生まれた結果、その人々がかれらのアイデンティティを表出する手段として「高級スワヒリ語」を生み出した。社会経済的環境の変化が民族でもない新しい集団を発生させた。その集団は、かれらのアイデンティティを表出するために新しいスワヒリ語の社会階層的変種を作り出したのである。

国民というアイデンティティを創出する目的で強引にすすめられたタンザニア政府のスワヒリ語優遇の言語政策は、タンザニアにおけるそれ以前のスワヒリ語拡散の歴史もあって、国のすみずみまでスワヒリ語を浸透させた。しかし政府の言語政策によるスワヒリ語の浸透は、けっして統一されたアイデンティティを創出することはできなかった。それどころかパレの人々のように新しいアイデンティティと新しいスワヒリ語変種をつくりはじめる人々もいる。この新しいアイデンティティも従来の父方出自のアイデンティティを解体するまでにはいたっていない。

3．まとめ

言語交替は、それに関与する社会間の社会経済的関係が決定していた。言語を選択するのに

もっぱら社会経済的に有利であるように、たとえば、エチオピアの事例ではどのように言語を選択すれば集団の存続がはかれるかが考慮される。しかしすべてがたんに社会経済的環境でわりきれるものではない。社会文化的要因も言語交替に関与することがみてとれた。

AL を死語にみちびく同化的バイリンガリズムに関与する TL に共通語、すなわち、スワヒリ語を設定すると、AL は死語にならずに保持される傾向が過去においてあった。その理由は、図２における死語の過程のなかで共通語、スワヒリ語が関与すると、「AL への否定的言語態度」が増幅されないことである。今現在、スワヒリ語は、タンザニアで威信のある言語となりつつあるが、過去において威信のある言語ではなかった。パレの人々によるスワヒリ語受容の歴史においても、スワヒリ語は、まずパレ社会の辺境にいる人々によって習得された。死語のプロセスにおいて TL が威信のある言語でない場合、「AL への否定的言語態度」が増幅されず、AL と TL は、使用領域を分割し、合い補い合って用いられる。つまり、安定的バイリンガリズムを形成する傾向がある。 最近タンザニアでスワヒリ語は威信を獲得しつつあるため、スワヒリ語を TL とした同化的バイリンガリズムが出現したのである。

注

1）図２は、Sasse, 1992 を参考に作成した。

2）資料は、Hieda, 1991 と Hieda,1996 を参照。

3）資料は、Heine & Mohlig, 1980 を参照。

4）資料は、筆者が文部省科学研究補助金（課題番号０８０４１０１５）により、１９９６年、１９９７年、１９９８年におこなったフィールドワークで集めたものである。

5）中等教育以上での教授用言語は、いまだ英語のままである。

6）スワヒリ語を第１言語として話すタンザニア海岸部の人々は、みずからをスワヒリ人と呼ぶことがないことに注目すべきである。

参考文献

Brenzinger, Mathias (ed.) 1992. *Language Death.* Mouton de Gruyter, Berlin.

Heine, Bernd & Wilhelm J.G. Mohlig (eds.) 1980. *Language and Dialect Atlas of Kenya. Vol.1, Geographical and Historical Introduction.* Dietrich Reimer, Berlin.

Hieda, Osamu. 1991. 'Omo-Murle, a preliminary report,' *Swahili & African Studies*, 2:73-91.

1996. 'Multilingualism in Koegu: Interethnic Relationships and Language, *Senri Ethnological Studies,* 43:145-162.

Kawada, Junzo & Katsuyoshi Fukui (eds) 1988. *What is Ethnicity?* (in Japanese), Iwanami, Tokyo

Maw, Joan & David Parkin (eds.) 1984. *Swahili Language and Society.* Institute fur Afrikanistik und Agyptologie, Wien.

Sasse, Hans-Jurgen. 1992. 'Theory of Language Death,' in (ed.) Brenzinger, *Laguage Death,* 1992, pp.1-20. Mouton de Gruyter, Berlin.